

「永劫の心のすみか」

学長 安 酸 敏 眞

ここに高橋はるみ北海道知事に特別のご臨席を賜り、また森本正夫北海学園理事長以下、多くの学園関係者の方々のご臨席のもとに、平成 29 年度の卒業証書・学位記授与式を挙行できますことを、心より嬉しく思う次第です。

春のこの佳き日に、本学を巣立っていかれる卒業生の皆さま、ギャラリーにてお子様の晴れ姿をご覧になっているご家族の皆さま、ご卒業まことにおめでとうございます。卒業式は新しいスタートにつながる一つのゴールであります。ここに至るまでにはさまざまなご苦労があったでしょう。しかし困難を乗り越えて無事学位記を手にしたことは、まことに慶賀に堪えません。大学を代表して心からのお慶びを申し上げます。

卒業証書・学位記授与式は、4 月の入学式と並んで、大学にとって最も厳粛な式典であります。馴れ親しんだ学び舎を巣立とうとしている今、皆さんの胸にいかなる思いが去来しているのでしょうか？ 大学生活への名残惜しさでしょうか？ 学友との惜別の思いでしょうか？ それともこれから始まる社会生活への不安でしょうか？ ひとそれぞれですが、ご卒業に際してひとこと式辞を述べさせていただきます。

表題に「永劫の心のすみか」とありますが、これはご存知のように、北海学園大学の学歌のなかに出てくるフレーズです。本学の学歌は、初代の教養部長を務められ、本学最初の名誉教授にもなられた、三森定男先生の作詞になるものです。「あれくるうあらしに／さかまく大海原に／若人よ恐れず船を出せ／ほこりと友情もて／かたく結びつこうよ／大いなる世界をつくるために／永劫の心のすみか／われらが母校 北海 北海／北海学園大学」。あとで全員で斉唱いたしますが、品格と情熱を兼ね備えた実に素晴らしい歌詞です。

さて、「自分が卒業した学校」のことを、日本語では「母校」といいます。「母校」という言葉は、“alma mater”（アルマ・マータ）というラテン語に由来します。マータ（マートル）は「母」を意味しますので、“alma mater” は“nourishing mother” ないし“bounteous mother”、つまり「養い育ててくれる恵み深い母」というほどの意味です。このラテン語は、もともとは古代ローマ人が女神たち、特に豊穡の神であるケレス（Ceres；ギリシア神話のデメテルに相当）に与えた名称に由来しますが、今日では英・独・仏などの西欧の近代言語の中にすっかり定着して、ラテン語表記のままに通用するようになっています。

おそらく在学中は、自分が在籍している大学のことを、あまり意識しなかったでしょうし、その有難味を実感したこともなかったかもしれません。しかし卒業して日が経つにつれて、「母校」に対する愛着や郷愁が徐々に募ってくるものです。親元を離れて一人暮らしを始めてみると、あるはいざ他家に嫁いでみると、次第に親や実家の有難味を実感するようになるのと似ています。親や実家がそうであるように、「母校」は「永劫の心のすみか」、つまり永遠の心のふるさとであり、またそうでなければなりません。「永劫の心のすみか」ということは、深い愛着、郷愁、感謝、連帯などを含意しています。卒業式にあたり、北海学園大学が「永劫の心のすみか」であるかどうかを、全員で今一度問うてみましょう。

学歌は「あれくるうあらしに／さかまく大海原に／若人よ恐れず船を出だせ」という言葉で始まりますが、皆さんが船出しようとしている2018年という年は、古代中国の五行思想による干支（かんし／えと）でいえば、十干の戊（つちのえ）と十二支の戌（いぬ）とが合わさった戊戌（つちのえ・いぬ）の年であって、大きなエネルギーが重なり合うことから、良い方向にも悪い方向にも勢いが増し、社会の各方面で大変動が予測されている年であります。しかし本学で学んだ皆さんは、「あれくるうあらし」も「さかまく大海原」もものともせず、勇ましく船を漕ぎ出すでしょう。なぜなら、本学のスクール・モットーは、「開拓精神／開拓者精神」だからです。

「開拓精神／開拓者精神」とは、安楽な生き方とは真逆のチャレンジ精神、既得権益や既存の仕組みに依り頼まない独立独行（self-reliance）の精神を意味しています。皆さんはいま学園を築立って「大いなる世界をつくるため」の第一歩を標そうとしています。しかし「大いなる世界をつくるため」には、いかなる奮闘努力が必要でしょうか？ 地下鉄の「学園前」駅の階段の上方の壁には、“Catch the World, Catch the Future”と記されています。「世界を掴め、未来を掴め」というのですが、「大いなる世界をつくる」ための努力は、まさに世界と未来を掴むことに通じます。しかしこのことは容易いことではありません。たゆまぬ自己研鑽と挑戦なしには、世界も未来も掴むことはできません。独立独行あるいは自主独立の歩みはときに孤独であり、困難がつきものです。しかし困難に遭遇したとき、孤独感に苛まれたとき、共通の母校をもつ同窓生のネットワークが強い味方となります。いまや8万7千人を越す同窓生が全道のみならず、全国で活躍しています。ですから、母校との絆は様々な場面であなた方をバックアップしてくれるでしょう。

本学の初代学長である上原轍三郎先生は、第一回卒業式の式辞において、次のように語られました。

願くは諸君、交友を偲び、母校を忘れず、母校をすてず、永く母校とのつながりを持ってもらいたい。……永き将来に亘って、諸君を鼓舞し、激励するものはやはり母校である。諸君に知識の糧を与え、精神の慰安を与える所はやはり母校である。願わくは諸君母校を忘れず、強ききずなを持ってつながりつつ、各自、各所に自己の成長発展を計ってくれたまえ。

わたしもまったく同じことを皆さんにお願いします。母校との絆を大事にしてください。アルマ・マータたる母校は、皆さんにとって「知識の糧を与え、精神の慰労を与える所」です。「ほこりと友情もて／かたく結びつこうよ」とありますが、このような誇り・矜持・友情・連帯は母校で育まれたものです。そのような「慈しみ深き養育の母」として、母校は皆さん一人ひとりにとって「永劫の心のすみか」であります。わたしたち教職員一同は、北海学園大学をそのような場所にすべく、今後とも一層の努力をする所存です。

Pioneer Spirit をもって凛々しく船出する卒業生の皆さん！ ホームカミング・デイは言うに及ばず、いつでも母校のキャンパスを訪れてください。北海学園大学が皆さんにとって「永劫の心のすみか」となり、大いなる連帯の輪がますます広がることを祈念いたします。皆さんの門出に幸多からんことを祈りつつ、これをもって学長式辞といたします。